




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2937 号	氏名	内藤 佳子
審査担当者	主査	赤木 由人	
	副主査	藤本 公則	
	副主査	秋葉 純	
主論文題目： Rechallenge treatment with a platinum-based regimen in patients with sensitive relapsed small-cell lung cancer. (プラチナ感受性の再発小細胞肺癌患者に対するプラチナ併用化学療法再投与の有用性)			

審査結果の要旨（意見）

肺小細胞がんは悪性度が高く予後の悪い疾患である。治療はプラチナ製剤などの薬物療法や放射線化学療法が主体となる。近年の創薬は目覚ましくその効果に期待が大きく、1次治療で終了することなく、2次、3次とガイドラインでも推奨されるようになった。本疾患においては従来より1次治療で用いたプラチナ製剤を2次治療でも再投与することが行われていたが、その有用性の検討がなされていなかったという実臨床の疑問点にインパクトを与える研究である。この検討結果より、1次治療で比較的効果が持続した症例の中でも、薬剤に対して感受性があると判断された症例に対しては、2次治療でも効果が期待できることを示した。手術適応となる症例が少ない本疾患において、治療薬剤の選択肢が増えたことは肺癌治療に関わる貢献度は高く、意義のある研究と考える。さらに、この結果が他の薬剤でも同様のことがいえるのか、プラチナ製剤に関してのみの結果なのかは興味のあるところである。本研究は後ろ向き検討であること、2次治療の薬剤選択が主治医の裁量に任せられていたことが残念であり、今後前向きの検討や基礎的得らざるの研究が望まれる。

論文要旨

再発小細胞肺癌患者は、初回化学療法後 90 日以上経過して再発した場合にはプラチナ感受性があると考えられる。プラチナ感受性再発小細胞肺癌患者に対し、1 次治療で使用したプラチナ併用化学療法を 2 次治療で再投与することは従来から行われているが、その有用性は明らかでない。プラチナ併用化学療法再投与の効果を検証することを本研究の目的とした。1999 年 1 月から 2016 年 12 月の間に 2 次治療を受けた全てのプラチナ感受性再発小細胞肺癌患者を対象とし、プラチナ併用化学療法再投与群と非再投与群で治療結果を評価した。対象期間に 2 次治療を受けたプラチナ感受性再発小細胞肺癌患者は 81 名で、再投与群は 67 名、非再投与群は 14 名であった。無増悪生存期間は再投与群で 5.1 ヶ月、非再投与群では 3.5 ヶ月、生存期間中央値はそれぞれ 10.8 ヶ月、8.2 ヶ月であり、有意差はみられなかった。1 次治療で化学療法のみを受けた患者を対象としたサブグループ解析では、再投与群の無増悪生存期間は非再投与群と比較し有意に延長しており（中央値 5.4 ヶ月対 3.6 ヶ月、 $p=0.0038$ ）、全生存期間も長い傾向にあった。本研究の結果から、プラチナ感受性の再発小細胞肺癌患者に対するプラチナ併用化学療法再投与は、特に 1 次治療で化学療法単独治療を受けた患者において有用な治療選択肢のひとつである可能性が示唆された。